

【はじめに】

阿波市久勝の山王地区は、農家16戸がハウス約10haで加温～無加温栽培によるデラウェアの5・6月出荷を行い、四国で最も早い産地となっている。

しかし、近年のハウス暖房に要する燃油価格の高騰により、4月出荷に当たる年内加温は姿を消し、無加温栽培を中心とした6月出荷が増え、農家労力が過重となるとともに、価格も低迷し、暖房経費増も合わせた三重苦で農家を苦しめている。

デラウェアの枝変わり変異種「紅南陽」は、早生系統であるだけでなく、単為結果性、結実性、果粒肥大性が優れることから、現地の農家圃場において、ハウス暖房無しでの4月出荷栽培を実証した。

【紅南陽の品種特性】

- ①デラウェアより7～10日程度成熟が早い。
- ②単為結果性、結実率ともに高く、自然状態で95%以上が種無し果粒となる。
- ③展葉5～6枚時にジベレリン処理することで花穂が伸長し、短梢剪定でも長房・大房生産が可能。
- ④小果梗が長く果粒どうしが過密着にならない。
- ⑤2回目ジベレリン処理無しでもデラウェアと同等の果粒となり、同処理果粒は1.5倍の肥大となる。

【無加温4月出荷栽培の概要】

- ①落葉が完了していない11月15日に冬季剪定し、地温低下の小さい11月20日にビニール被覆、11月22日にCX10 20倍液を結果母枝に散布、7日後11月28日にも同25倍液を散布して休眠打破を促した。



図1 「紅南陽」の無加温4月出荷栽培の概要

- ②休眠が浅く地温上昇も早かったため、ビニール被覆翌日から水揚げし、1ヵ月を要せず萌芽した。
- ③展葉6枚となった1月21日にジベレリン100ppm液で花穂を拾い漬けし、1月25日に生育の遅れた花穂に同100ppm液を一斉に散布処理した。
- ④2月8日に開花直前の花穂にフルメット3ppm液、満開10日後の2月20日に果房にジベレリン100ppm液

を散布した。

- ⑤日中はほぼ換気せず蓄熱させ、夜間は二重被覆だけで保温に努めた。夜温は5℃を下回る事無く、発芽後は日中30℃以下で管理した。



図2 展葉6枚時の花穂

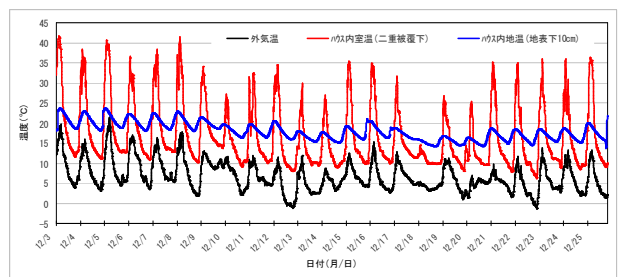


図3 ビニール被覆直後の12月3日～25日の外気温、ハウス内室温、ハウス内地温の推移

- ⑥4月4日には着色が始まり、4月18日には糖度19度を超え減酸も早く、早々に出荷可能となった。この時点で、近隣のデラウェア加温栽培は出荷に至らなかった。加温栽培の出荷を待ち、5月6日に出荷開始、10日後出荷終了となったが、加温栽培より約2週間程度早期出荷できることを確認した。

【おわりに】

「紅南陽」は自然状態で種無しになる極希なデラウェア枝変わり種である。そのため1回目ジベレリン処理適期の幅が広く、早期処理で失敗がなく散布処理も可能である。また小果梗も伸長するので裂果もなく摘粒作業の必要がない。さらに減酸が早いため、糖度上昇を確認して2週間程度の早期出荷も可能と思われる。

今回の無加温栽培が加温栽培より早く出荷できるという結果は、栽培技術というよりは「紅南陽」という優れた品種の特性によるところが大きい。

以上のことから、4月出荷栽培だけでなく、ハウスの普通期栽培から露地栽培まで単作・複合を問わず導入できるので、既存栽培面積の1.5～2.0倍の規模拡大も可能と考えられる。

山王地区では平成25年度に農家7戸、ハウス面積1haで「紅南陽」への改植を進めている。この品種を県内産地に広く普及させ、数年後には露地も含めた本県デラウェアの主力系統に育てたい。

(高度技術支援課 経営園芸担当 遠藤 隆行)